慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | ME=情報革命の基本的性格 : 「ポスト冷戦」段階への基礎視角 |
| Sub Title | The information technology revolution in historical perspective |
| Author | 南, 克巳 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1994 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.87, No.2 (1994. 7) ,p.180(26)- 198(44) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19940701-0026 |
| Abstract | |
| Notes | 特集 : コンファレンス「20世紀末の資本主義」 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19940701-0026 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」87巻2号（1994年7月）

# ME＝情報革命の基本的性格

## ——「ポスト冷戦」段階への基礎視角——

南　　克巳

## I

今日のテーマは標題に掲げるとおり「情報化」の問題，じつはそれを切り口に「ポスト冷戦」の主題に迫れたら，というほどのところでありまして，もともとこのコンファレンスで私に与えられた《冷戦構造の解体とその意義》という，大変大きくアクチュアルな課題には，まともに応えられる形にはなっておりません。また当初はその積りで準備し提出もした，「レジュメ*」からも大きくズレております。契約違反さえ問われかねぬ不手際の段，いまはひとえに関係各方面にお詫びするほかありません。

とはいえ，「ME（マイクロ・エレクトロニクス）化とアジア化」という問題視角こそ，戦後段階（私はそれを冷戦段階としてきましたが）とりわけ70年代からのその解体過程にたいするひとつの有効な切り口として設定してはきましたが（1986年度土地制度史学会大会共通論題報告），今日の主題になる「情報化」という，もう一歩も二歩も進めた問題視角となると，書いたものはおろか，正直申しましてそのための備えさえ欠く私のことです。それなりの思いがその間になかったといえば嘘になります。「ねおだま」旋風（正確には「ダウンサイズ化」「ネットワーク化」「オープン化」「マルチメディア化」の順かと思いますが）とでも申しましょうか，1980年代後半からとくに90年代に入って，ME技術の新展開をベースに，情報処理・通信の世界で本格化しはじめる，まさに革命的ともいうべきあの急旋回にまず衝撃され，それが社会の科学にも突きつけてくる新しい課題の重大さにようやく思いあたるところがあったのだ，と白状しておきます。そこで，のっけから先走ることになる

* ついでまでに。そこでは，ここでとりあげる「情報化」の新展開の扱いも，丁度時を同じくする，一般的には冷戦の終結と世界的不況の重奏との関連で，また特殊的には「ME化とアジア化」（米——日——アジアNICsのcomplexの形成と解体→中国化），そこでの米日関係の浮沈（「逆転」と「再逆転」の論理）との関連で，要するに問題の局面転換を世界史的に枠づけてきた基本的要因とのいま少し歴史＝具体的な関係で，整理・検討する体裁をとっておりました。

のですが，その辺のところを，不手際の言い訳をもかねて，率直に表明することで導入の部につなげようと，思い至ったという次第です。

まず，「情報化」の現段階の位置づけの問題。それは，もともと冷戦の強圧をつうじて世界＝宇宙大にのびる軍事的空間に，WWMCCS（World-wide Military Command & Control System）下の核ミサイル軍事機構＝キイ産業の形で，強行的に定位せしめられてきた20世紀の科学の潜勢力（物理学革命起点＝基調[1]）が，その不可避的な弁証法（冷戦体制解体の過程）をつうじて産業一般へ，通常の生活空間へと解き放たれてくる（「ME化とアジア化」基調[2]），その本来の流れのまさに本格化してきた段階と，さしあたってはおさえられよう。いわば「軍事＝情報化革命」という疎外と顚倒のおそるべき極致をもってはじまる20世紀生産力の新基軸（「ニュートン世界」をこえる「極大と極微の世界」に立脚基盤を遷移させたそれ）も，その後の「ME化」をベースにようやく「産業＝情報化革命」へと旋回をはじめた時代，としてもよい。

じじつ，そうしたものとして，情報化の最新の動きは，かつての大型汎用コンピュータ（メーン・フレームーMFと以下略記する）を中心に据えたあの分断と対抗のヒエラルキーの世界とは，明らかにちがった世界をつくり始めたのではないか。今からすればなお，かの軍事情報システム（WWMCCS）のcivil versionの域を出なかったとさえ見られる，情報処理のあの中央集中＝管理の個別的システム（IBM全盛期のMFによるオンライン・システム）の段階とは，質的にちがう世界をつくり始めたのではなかろうか。MFにかえてパーソナル・コンピュータ（以下PCと略記）ないしワーク・ステーション（以下WSと略記）を中心に据え，それら相互を連結してグローバルにひろがってゆく情報ネットワークとそれが自立化させる新種の電子情報空間を双方向＝共同的に利用するその世界は，まさにそうした新しい装いのもとに，「ポスト冷戦」下の自然と人間の営みを普遍的・グローバルにとらえ，その営みを人間個々人の労働と生活の深みから根底的に変えてゆく現代の「造物主」としてたち現れるに至った，とみるべきではないか。いまやこの現代の「造物主」の審判のまえに，ほかならぬ資本主義として枠ぐまれ冷戦体制へと総括されてきた，世にある一切の諸関係（社会的＝文化的また対自然的）は，ますます厳しくなる自己点検と自己変革の波に洗われつつあるのではないか（「世界的リストラ」の波）。

もしそうだとすれば，「ME化」とそれにもとづく「情報化」の問題を，もはやなにか特殊部分問題として処理することは許されまい。かつてのように，軍事的な，先端技術的なあるいは個別生産＝経営管理的な，といった多かれ少なかれ限定的な問題領域にだけ限ることはできない。端的にいって，それは，まずなにより「ポスト冷戦」という形ではじまるこの新しい歴史時代の総体の編

（1） 拙稿「アメリカ資本主義の歴史的段階――戦後＝『冷戦』体制の性格規定――」（『土地制度史学』47号，1970年），「アメリカ資本主義の戦後段階――若干の基礎指標――」（同誌45号，1969年）参照。
（2） 拙稿「『冷戦』体制解体の世界史的過程におけるアメリカ資本主義――ME化とアジア化を軸線として――」（土地制度史学会『1986年度大会報告要旨』）参照。

制にかかわり，その人類史上の位置と展望を扼するものとして，いままさに課題の焦点にすえられねばならない，ということになろう。あたかも「分業」がA・スミスの経済学のなかで，「機械」がマルクスの体系構成のなかで付与されたのにも似た『強調』[3]を，「情報化」の現代はようやく社会の科学に要請するに至ったのだ，というべきかも知れない。たとえ――，過程はなお，依然「ポスト冷戦」下の資本主義の古いカラの中で，世界的リストラという「煉獄の時代」を通過しつつある，否通過しはじめたばかりだ，としても。

むしろそれだからこそ，いわなければならない。「情報化」の現代が突きつける問題は，そうした将来的展望にかかわるまえに，まさにそうした「情報化」の時代を呼びこんだ「ポスト冷戦」下のほかならぬ資本の新しい運動の理解のためにこそ，まず要請されるのだ，と。周知のように，新しい情報ネットワークをとりこみ，それがつくりだす新しい電子情報世界を利用することに，資本の競争と蓄積の軸足が移ってゆき，その意味で情報化の全機構が資本の運動と一本化してゆく，いまの時代では，前者の理解なしには後者の運動じたいの理解が困難になってきているからだ（例えば，銀行の「オン・バランス」勘定の数倍から10数倍にもふくれ上る「オフ・バランス」取引に象徴されるようないわゆる「デリバティブ」市場の急膨張ひとつとってみよ[4]）。また逆に，「情報化」の現段階がさし示す将来展望のことも，その情報化の成果をとりこむ資本のこの新しい運動の発展をつうじてしか，そこに胚胎する新たな矛盾の成熟をつうじてしか貫かれることはない以上，後者の理解なしに前者の展望を，少なくともその現実的な姿で語ることなど，もともとできない相談だろうからである。

先走りも度をすごした感があるが，以上要するに，「ポスト冷戦」という形ではじまる新たな歴史時代を展望しつつ，その展望の現実の「執行者」ともなる「ポスト冷戦」下の資本の新たな運動理解のための基礎視角を準備するという意味で，「情報化」の最新の局面が示唆する多面的な含意を，まず探っておきたかった，というわけである。

## II

問題の焦点をあわせる意味で，全過程のベースとなるME革命の展開をさきの「情報化」の角度から整理することからはじめよう。

ここでME革命という場合，それは，1947年のトランジスタから58年のICへと進んだME技術の進展が，70年代初頭のLSI段階に至ってついにコンピュータ・システムのハード面を構成する2

（3） Marx-Engels Werke, Bd. 23, Dietz Verlag, S. 369. 青木文庫版『資本論』(3) 581頁。

（4） 1990年代初めの米3大マネーセンター・バンク（シティコープ，モルガン，バンカーズトラスト）の例――中尾茂夫『ドル帝国の世紀末――リスク回避がリスクを呼ぶ――』日本経済新聞社，1993年，参照。

つの柱――中央演算機構CPUと主記憶装置RAMのワンチップ化＝量産化を，したがってコンピュータ自体のチップ化と量産化の時代（マイコンの時代）を切り開く，その時以降の展開を指しているが，問題の「情報化」つまりコンピュータ開発を前提にしたその利用＝普及という角度からはとくに，70年代以降のその革命過程をさらに**2つの階梯**に区分するのが妥当かと思われる。即ち，はじめのLSI段階に対応する革命のなお経過的で第1階梯的な開始期と，VLSIからULSI段階への移行（80年代から90年代への移行）に対応して革命が本格化するに至る第2階梯とに。次のような文脈からである。

第1階梯では，革命は，まずなによりも機器＝工程制御用のマイコンの形で（MCU開発），機器の全範囲を征服【コンピュータと機械との一体化――マイコンの時代】，その限りで，それまでなお基本的には装置産業や定型的業務に限られていたMFのオンライン下の制御の限界を突破，量的＝質的に自動化の新しい段階を画する（FMS，さらにCIMへの展望）。だが情報処理＝制御システムとしてのマイコンの利用も，LSI段階に制約された価格・性能上の限界から，基本的に機器工程制御という特殊用途（MCU）に限られ，情報処理＝通信システム本来の一般的で多目的な汎用領域ではなお古いMF支配の体制を崩せず，むしろそれに包摂され，逆にその古い支配を完成させる方向に働く【古いMF体制下でのME＝情報革命の進行期＝過渡的階梯――ちなみに，それがME＝情報化の「日本型」の成立基盤となり，また基調となる】。また，それに対応して，ME革命の技術＝経済上の推進軸も，同じくこの革命をつうじてコンピュータのメインメモリの地位を不動のものとし，それまでの磁気メモリと急激にとって代わることになるRAMに移り，それにたいする爆発的な需要を背景に，この典型的な汎用＝量産部品とりわけDRAM開発＝量産競争がこの階梯をリードする【この意味でも過渡的階梯――ちなみに，ここでもそれが，この階梯をつうじるME＝半導体生産の「アジア化」，米日「逆転」の基礎となる[5]】。

以上二重の意味で過渡的なこの第1階梯にたいして，第2階梯では事態はまさに一変する。革命はその本性を露にする。

まずVLSI，さらにULSI段階に至ってはじめてマイコンの汎用化への途（MPU開発）がPC＝WSという形で本格化し【コンピュータと人間＝労働との一体化――パソコンの時代】，そのPC＝WSが，単体としても既存のMFに迫るほどの高性能化となによりもその低廉性を武器にMFの支配を掘り崩す（87年32ビットMPU，さらに93年64ビットMPU）。同時にまた，この段階になってはじめて可能かつ本格化するPC＝WS相互の連結＝ネットワーク化とそれによる情報の分散＝並列処理の展開が，価格性能比のことは別としても，個別＝分断システムとしての枠を破れな

（5） 筆者は，ここで新しくME革命の第1階梯と名づけた時期（1970年代央～80年代央）にたいする問題の一応の整理を，《ME化とアジア化》という視角から試みている。さきにふれた土地制度史学会1986年度大会共通論題「『冷戦』体制解体の世界史的過程における再生産構造――米・日・アジアNICsの線上での問題整理――」での著者の報告「『冷戦』体制解体の世界史的過程におけるアメリカ資本主義――ME化とアジア化を軸線として――」（同学会『大会報告要旨』1986年，58～68頁）。

いMFによる中央集中処理方式の限界を最終的に突破し，こうしてMFの支配にかわる新しいPC＝WSの外に向かってグローバルに開かれたネットワークの支配が不動のものとなっていく（それに対応して，こんどはMFのほうが逆にこの新しいネットワークにたいする「サーバ」として社会のデータ・ベースの管理を担う位置につく）。なおここでもまた，それに対応して米・欧を先頭に世界市場におけるMFからPC＝WSへの急激な需要シフトが進むだけでなく【1989－91年画期で逆転——但し「文明世界」では日本だけがなお唯一の例外。「大艦巨砲主義」の再現！】，ME＝情報化革命の推進軸も，それに連動して，大きくハードの領域からいまや明確に「ソフトウェア」の領域にシフトする。即ち，MPUの汎用化，PC＝WSとしてのその利用と展開というこの階梯のまさに基調を設定＝デザインし，いまやその成否の鍵を握るにいたるソフトウェア開発（PC＝WS用の，そのネットワーク化とさらにはマルチメディア化用の基本ソフトOSと応用ソフトASの開発）へとシフトし，総じてこうした新たなソフト需要の爆発を背景に，ソフトによるハードの「囲い込み」「付加価値吸収」をめざすMPUとソフトの国際標準化競争が，それをめぐる新たなstrategic alliance, virtual coporation戦略が，この階梯を新たにリードする【競争と独占そして蓄積の世界基軸の位相遷移——ちなみに，ここでも，それが，ほかならぬ第1階梯をつうじて成型されかつ世界市場中心に踊り出た「日本型」ME＝情報化の存立を，まさに全機構的に問うことになる——「逆転」「再逆転」のレベルをこえる全構成的なリストラへ[6]】。

以上，要するに，ME革命の2つの階梯をつうじMF（情報処理の中央集中化方式）からPC＝

（6） この第2階梯への移行が渦中にあるME＝情報関連資本にとってなにを意味したかはここでは問題にしないが，それにしても，この移行が，周知のとおり，一面では，体制的ともいえたIBMの独占の傘によらざるをえなかったということ（IBM-PCの名におけるPCの生成軌道の敷設——それはまた，90年代におけるこの傘の喪失のもつ致命的意義にもつながる），だがその同じ移行は，その内容の点で，IBMのその独占を支えてきた伝統の立脚点（IBM360の名で誇示された全方位＝純血主義）の全否定，全放棄となり（IBM—Intel—MSの3社連合の名におけるPC基幹部，MPUとOS開発のベンチャービジネス依存，ハード部品の対アジアOEM調達へ），ひいてはIBM独占じたいのその後の急速な崩壊と3社連合の分解・解体へと行きつかざるをえなかったことは，示唆的といえよう。発生的にも概念的にもちがうMF（IBM）とPC（VB）とのこの運命的出会いの点は措くとしても，問題はもはや個々の企業経営戦略のレベルを越えたところに移っていることを，この事態は示唆するからである。端的にいって，本文で述べたような，ME革命の第2の階梯が生み出すシステム開発＝生産における新しい段階がその基礎には横たわっていたのだ，という意味からである。例えば，システム開発の期間が，MFベースのIBMのかつてのサイクルよりも20倍も早く，かつそのコストが20倍も早くなったその性能の向上テンポのさらに2乗に比例して奔騰するMPU開発というように，「単独事業（いまやIBMもこのうちに入る！）としての半導体事業の終焉」が公式に宣告され，新種の企業間の「戦略的提携」が，さらには企業を越えて張りめぐらされる情報ネットワークの機動的な相互利用のうえにたつ“virtual corporation”の形成が，この世界の合言葉となる，そうした段階への移行が横たわるという意味からである。——以上は，前注で参照を乞うた第1階梯の問題（DRAMの量産問題基調）とのつり合い上，この第2階梯移行が含む生産構造上の問題をさしあたり指示したにとどまる。なお「レジュメ」参照。

WS（情報処理の並列・分散方式）への「情報化」のいわば軌道転轍，より正確にはMFの限界を止揚する本格的軌道の敷設へ――これが《ダウンサイズ＝ネットワーク＝オープン＝マルチメディア＝化》の名において進行中の情報化の現局面の基本内容であり，基調をなす，ということである。それは，およそ「情報化」の歴史におけるひとつの革命的転換の開始を告知するものというべく，そのなかにあって，ME革命の第2階梯への移行は，その転換を支えるベースとして，またその基礎上に本格化するPC＝WSのネットワークの展開は，その転換の集約点ないし軸線として，それぞれ現れることになる。

だとすれば，この転換のもつ『歴史的』意義が次に問われねばならぬだろう。とりわけこの転換の軸線を担うPC＝WSベースの情報ネットワークの社会経済的意味が，それのもつ歴史的展望が，問われねばなるまい。さきに言ったことだが，この転換をつうじて「情報化」の問題はすでに，技術論の問題から社会経済の問題に，未来論の問題から日常生活の問題に，それも特殊＝局部的な問題から社会生活全般の問題に，そしてなにより人間個々人の労働と生活の問題に，なってきているからだ。同じく繰り返しになるが，「情報化」の新局面が社会の科学につきつける新しい問題とは，まずこの点に浮かび上がるからである。

この文脈から，さしあたりここで注目すべきは次のことであろう。

MFからPC＝WSへのこの転換をつうじて，まず第1に，情報システムの利用＝操作が，MFの場合のような組織管理にかかわる少数の特定技術者集団の手から解き放たれ，ひろく一般公衆のまえに開かれ，したがってまたシステム自体の役割も管理と支配の道具からその反対物へと転じてゆく展望がひらかれることである。次節でやや詳しくみることだが，じじつ，情報システムは，このPC＝WSネットワークという形ではじめて労働の全範ちゅうを，しかも個々人のレベルでとらえ，またそのことをつうじて，在来一切の社会編制のそのレベルからの再編を，さらにそれを支える個人の能力とりわけその意識世界の拡大を，ひとつの技術学的必然としてゆくからだ。

それのみではない。情報利用，その役割におけるこの転換，いわば民主化への展望には，当然のことながら，それと相関関係にたつ情報システムの開発面での転換が，いわばその人間化への展望が対応する。じじつ，この転換をつうじて，システム開発の軌道は，かつてのMFベースの巨大システム開発主導（ICBM＝アポロがその原型の軍事＝国家主導型のcivil version）からPC＝WSネットワークベースでの「マン・マシン・インターフェース」の開発主導（いわゆるend user computing，GUIとマルチメディア化さらに個人の全面発達支援装置＝「メディア・コンピュータ」への途）へとシフトし，またそのことをつうじて，在来一切の社会的障壁と規制を突き抜けるPC＝WS間の新たな電子情報空間の形成と自立化が，したがってまたその新しい世界を，併行する広域情報＝通信インフラの構築整備（「サーバ」と「ハイウェー」）を共通ベースに，多面的で社会的な共同利用の体制に組み込んでゆく方向が，これまたひとつの技術学的必然となってゆく【MFやマスメディアがつくってきたそれとは次元と方向を異にする世界――いわば「万人の万人による万人のため

の」情報発信＝利用への展望[7]。そしてこの必然は，さきの必然，即ち旧社会の再編と新しい個人の創造への展望とあい補い支えあいながら，ひとつの新しい社会編制への展望のうちに融合してゆく関係にあること，いうまでもない。

だが，これは，少なくともその展望の点で，これまでとは明らかに違った世界の出現ではないか。情報システムがなお，その技術学的限界から，性能と価格の限界から，特殊な軍事空間や政治＝経済＝社会組織の管理の上層を，いわば「上から」とらえたにすぎなかったそれまでの世界，その意味で情報システムがなお既成の社会をベースとし，その上にそびえたつひとつの『上部構造』にすぎなかった段階とは明らかにちがう世界の出現ではないか。またその限界ゆえに，情報システムの役割も，なお既成の社会秩序の破壊者というよりはその完成者としてたち現れざるをえなかった段階（冷戦体制のいわば経済的シンボルとしてのIBMの体制的独占！　またそれにつらなる日本型「情報化」社会！）とは明らかにちがった世界の出現というべきではなかろうか。総じてそれは，次のような総括を我々に迫るものではなかろうか。

70年代にはじまるME＝情報化の革命は，MFからPC＝WSへのこの軌道転轍をつうじて，ようやくその本来の姿を現し，そのまさに本来の姿において，ひとつの新たな社会革命を開始させるに至った。かの古典的な産業の革命に比定していえば，かつての「産業＝機械化」の革命にたいするいわば「産業＝情報化」の革命を開始させるに至ったのだ，というべきではないか。そしてそれが，「ポスト冷戦」という形で始まるこの新しい歴史時代を，その破壊と建設の作業を，基礎的に制約し，枠づけてゆくのではないか。その意味からまた，この転換の軸線をなすMFからPC＝WSへの，そのネットワークへの移行は，「工業化」（＝機械化）の歴史におけるかの《道具から機械への移行》にも比定さるべき位置を，この「情報化」の歴史のなかに占めるに相応しい，というべきではないか。

とはいえ，以上はただ，後に続くやや内容的な検討にそなえて，さしあたり小論のモチーフを提示したにとどまる。

---

（7）　ちなみに。この世界史的ともいうべき転換を内から支えてきたものとして，すぐれてアメリカ的な次の事情が，なおここで，想起されてよい。この国を支配する「冷戦」帝国主義的なDOD＝AEC＝NASA主導の開発軌道のもとでさえ，否むしろそれとの特有の連繋をつうじて，既成の巨大独占体の支配さえ分解・圧倒し去るベンチャービジネスの広汎かつ頑強な族生・繁茂（その先頭にアップル・インテル・MS…がたつ）とその全国土的な地帯分布の形成（その頂点にシリコン・バレーが位置する）であり，さらにはその底になお息づくこの国に伝統的な「草の根」民主主義の開発土壌がそれである。それはまた，この同じ世界史的転換をまえに「自失」の態さえみせる日本型ME＝情報化の歴史的位置と展望を測る一助ともなろう。上の文脈からすれば，この転換で歴史の批判のまえにまず立たされるのは，ほかでもない，もともとその種の開発土壌の欠如（歴史的前提欠如＝圧殺）を「官民一体」によるアメリカ後追いでカバーしつつ，その成果をもっぱら「系列」独占体の企業利益とその「日本的経営」の補強のために，まさに「会社主義」的に利用してきた，その日本型ME＝情報化であろうからだ。

## III

そこで，PC＝WSベースのネットワーク化に内蔵される情報化のそうした展望的含意を，ここではさしあたり基底的な労働の側面に限定して，いま少し内容的に探ってみよう。

情報のシステムが巨大なMFの階層的序列にしたがってではなく，PC＝WSをベースとし，それら相互のネットワーク化をつうじて編成されるようになるということで，いちばん重要なことは，この角度からはさしあたり次の2つの点に認められよう。

まず第1は，そこではじめて，情報システムが，組織管理にかかわる特定の専門技術的労働階層の手から解放され，ひろく一般の労働を，原理的には人間労働の全範ちゅう，全範囲をとらうるにいたること。一般的（科学＝技術的）労働と直接的労働とが，また直接的労働と間接的労働とが，既成の企業＝組織内でうけとる管理階層と職務分担上の複雑な仕切りをこえて，生産と蓄積の流れを統轄するネットワークのもとに連結＝統合されてゆく。それだけではなく，労働のこのいわば全範ちゅう的連結＝統合は，そのネットワークの広がりに応じて（この広がりにはMFによるオンラインシステムの場合のような技術上の制限はもはや存在しない），企業（資本所有）の枠をこえ，産業部門と国境をこえ，まさに「生産と分配の全社会的運営の単一の機構」へと融合してゆく方向をさし示すことになる【生産と労働の社会化の新しい段階】。だがこの点を確認したうえでなおここでとくに重視したいいまひとつの点は，情報システムが労働の全範ちゅうをとらえるというさきの点の内容的な言い換えにもなるのだが，またそこではじめて，特定の管理階層や組織ではなく，ネットワークを担う普通一般の個人を，作業者＝労働者としての個人を，システム全体をつくる自律的な構成点（＝サブシステム）にすえたことがそれだ。なぜなら，以上の2つの新たな関係の結合をつうじて，人間の労働を永くその枠内に制縛してきた社会経済生活の管理と運営における在来＝資本主義的な定型【資本の専制がつらぬく工場＝企業内分業の「兵営的」秩序と競争と独占が支配する社会的＝国際的分業の「弱肉強食」の秩序】がのりこえられてゆく展望が，この新たな個人間の関係という基底的レベルからする労働の全範ちゅう的結合の新秩序形成への展望として，開かれてくるからである。この点，問題をさらに2段階にわけ，いますこしたち入ってみよう。

まずはじめは，PCベースのネットワーク化が，その技術的本性から，その担い手たる個々人にたいして付与する新しい地位，彼ら相互の新しい関係にかかわる。それはほかでもない。PCベースのネットワークの線上に位置をしめる個人がもはやMFのオンライン・システムの端末に制置された従属的個人ではなく，まさにそれとは対極的な一個の自律的な機動点としての位置にたつこと，その自律性の基礎は，2～3年に4倍というME集積の量子論的テンポをベースに，またますます高度化し多様化するソフト開発に導かれて発展＝強化の一途を辿るにちがいないこと，さらにそうした位置にたつすべての個人はまた，彼らを結ぶネットワークをつうじて，原理上，自分以外の

すべての個人と（全方位），直接＝無媒介に（職能と階層の序列を越えて）かつ双方向的に（対等），しかも即時の交流に入りうるという全く新しい関係にたつにいたること —— PC＝WS ベースのネットワーク化にそなわり，かつそれが不断に発展させてゆく，いまや周知のこうした技術的学本性を，さきの文脈のなかであらためて想起したいのである。それはまず，そうした技術学的本性からして，ひとつの革命を，すなわち，個と全体を結びつけてきた在来一切の社会＝経済関係の爆破と再構成を内蔵せざるをえないだろうからである。

あたかも，20世紀における原子物理学の成立が，他方でその新しい原理を照らしての「ニュートン世界」の再吟味＝物性物理学の新構築へと向かわせたときのように（戦後の ME 化の原点トランジスタはその直接の成果）。物理学の世界に進行した革命が，その直接の成果をうけつぐ ME 技術革命をつうじて，いまようやく社会経済生活をとらえはじめたのだ，ともいえようか。それはまた，社会＝経済生活じたいの歴史のうえでは，機械と大工業の出現が演じたあの「革命的」役割にも比定されえよう。伝統の手工業的＝身分制的な固定性をもって人々を古い工場内＝マニュ分業と社会内分業の世界にわけへだててきた，あの厚い「ヴェール」を一挙に引き裂いていった大工業，それが生みだした近代「技術学」のあの革命的本性に。[8]

なお念のため，問題の所在を確認しておく意味から，さらにつけ加えておけば，ME 化＝情報化の現段階のはらむそうした革命的破壊作用は，すでに眼前の事実としても，かの「規制緩和＝撤廃」（「自由化と国際化」，「改革と開放」）の名において，大は社会体制のレベルから小は社会生活の細目にまでひろがる「ポスト冷戦」下の世界的「リストラ」＝「リエンジニアリング」の大波の底流を構成するというだけではない。その革命的破壊力の作用はさらに，他方その作用のいわば体制的な帰結でもあった戦後冷戦体制の解体，いいかえれば戦後世界をほかならぬ冷戦体制として編成し，制縛してきた一切の規制のこの元締＝基柱の崩壊，それのもつ世界的インパクト（経済的には現下の世界的不況）とあい呼応して，いまやまさに劇的ともいえる演出効果を発揮し始めているのである【ちなみに，この破壊の大波は，別してこの国の場合，資本の側も労働の側も含め，その戦後の総体をまるごとのみこまずにはいない。伝統的な「個」の没却の歴史を底積に，新たに冷戦体制への骨絡みの依存を加えて，再建＝肥大化の軌道を突っ走ってきた，その戦後「日本型」国家経済社会の全構成を】。ともあれ，本題にかえって，第二段の問題，即ち PC＝WS ベースのネットワーク化のさらにもうひとつの重要な側面に進もう。

すなわち，かのネットワークの線上に成立する個々人の上述の新たな結びつきのうちにはさらに，個々人の意識世界での新たな関係の創造が，それをつうじる新たな展望が含まれるという点がそれである。いうまでもなく，ネットワークをつうじて各個人が他のすべての個人と直接＝対等＝即時の交流に入りうる関係ということは，もともとそのネットワークをつうじて集中されデータ・ベース化され，ネットワーク全体にさらに社会一般にたいして開かれた各種の情報資源の同じくネット

（8） Marx-Engels Werke, Bd. 23, S 510. 『資本論』青木文庫(3)774頁。

ワークをつうじる共同所有＝共同利用を前提し，それによって内容づけられ，動機づけられていたからだ。この内容＝動機の点からいえば，個人間の新たなその関係は，そうした共同所有と共同利用のうえにたつ，その意味で社会的な膨大な電子情報世界の構築とその現実世界からの自立化を媒介とし，ベースとしてはじめて成立する，その意味でも新しい関係であったからである。またその意味でも，PC＝WS ベースのネットワーク上に成立するこの新たな関係は，かつてのように中央による情報の一方的な集中と独占のうえにたつ，その技術学的本性からして集権的であった，MF のオンラインシステム下の関係とは，まさに対照的な れであったからである。

かくして，人々は，ネットワークを構成する自律的小宇宙として相互に直接＝対等に対応しあえるというだけではなく，自立化したこの新たな電子情報世界（その外延と内包の拡大には技術＝原理上の限界はない）をネットワークをつうじて相互にとりこみ共用＝共有することによって，いわば《全体的＝全社会的個人》へと成長転化をとげてゆく，そうした展望がひらかれるわけであって，この意味からもまた，既存の諸関係の革命を内蔵せざるをえない。旧社会のかの「ヴェールを引き裂いた」大工業が資本と社会に向かって「生産の一般的社会法則」としてつきつけた「労働の転変・機能の流動・労働者の全面的可動性」それを保証するかぎりでの「全面的に発達した個人」[9]への要請は，いまや意識世界の流動＝共有の次元にまで踏み込むわけであり，かつての「労働と知識の分離」[10]の原則とはまさに逆の「労働と知識の結合」が，いまや「生産の一般的社会法則」として現われることとなる。

以上のように，PC＝WS をベースとするネットワークの展開は，たんに ME＝情報技術上の革命たるにとどまらず，否まさにそうした性格のゆえに，個人の発達，彼らの社会編制，その原理におけるひとつの革命をも内蔵するのであって，まさにそうした技術学的な本性からして，ネットワークの線上で分散＝自律的に業務を遂行する各個人ないしその集団にたいする集中された全情報の公開と共同所有，そして担当業務に関する共同決定権（分権＝参加）の保障が，この自立化した情報世界の法則となり，その機能実現のための要件ともならざるをえない。そしてこれが，ME 革命にもとづく情報化のこの新段階が内蔵する展望的含意にかかわって，さしあたり，この角度から確認さるべき第一の要点となる。

だが，むろん，情報化のこの新たな進展も，あくまで資本によって導入され，資本の管理のもと「資本主義的に利用」される情報化の進展以外の何者でもないかぎり，それが志向する方向は，上来の展望的含意として示されたものとはまさに逆である。それは，資本がかつて機械の導入にさいしてまず，その母国イギリスで演じたあの事態の新装再版たらざるをえない。「風習と自然，年齢

(9) ibid., SS. 511-512. 同上 774-775頁。
(10) ibid., S. 382. 同上 599頁。
(11) ibid., S. 294. 同上 (2)477頁。

と性，昼と夜にかんするあらゆる制限を粉砕[11]」し，手工業的＝身分制的に化骨化した旧式分業の厚い「ヴェールを引き裂」きつつ，当時の労働者を新旧の別なくそのなかに投げこんだあの地獄絵を，こんどは新しい情報ネットワークがとらえる労働の新たな全ひろがり（事務的＝科学技術的＝および管理的労働の諸階層へ）と国境を越えてますます単一＝世界化してゆく労働市場の新たな全ひろがり（第三世界，さらに旧社会主義圏へ）を巻き込んで文字どおりグローバルに強行される，その名も「新」自由主義＝保守主義の反動の世界的な嵐として，端的には人間と環境のグローバルな破壊過程として，再版せざるをえない【さきの「規制緩和・廃止」「自由化と国際化」の名における「ポスト冷戦」下の世界的リストラ＝「リエンジニアリング」の資本主義的現実態】。そして，上来の展望的含意とかかわって問題となるもうひとつの側面がそこにあること，いうまでもない。

事態はまだはじまったばかりであり，またそれはもともとこの種の一般的なあげつらいを許さない，まさしく歴史＝具体的な分析だけがとらえうる無辺の新たな世界をひろげつつあるかにみえるが【21世紀へ向けての社会科学の「フロンティア」の形成。ただ序までに。事態の比較的に純粋な表象はいままたアメリカに，すなわち西欧に特徴的な旧労働組織の強固な残存や日本に体制的な古い諸関係の特殊な組み込みなどによる抵抗＝制約のない，この大陸的でいまなお世界にひらかれた移民の「合衆国」，ME 情報化の先進国に求められよう】，上来の展望との関連で必要なかぎりで，2，3の点をあげるとすれば――。

まず明らかなこととして，労働者個々人を自律的機動点にすえた全機構の新たな編制と運営を約束する，PC＝WC ベースのネットワーク化ということも，それが資本の専一的管理のもとにおかれるとき，その反対物に転化せざるをえぬことがあげられよう。そこでは資本の論理が，在来管理の職務＝階層別序列も既成の労働組織＝協約をものりこえて，直接に，個々の労働者のレベルにまで浸透するための強力な武器として，そのネットワークは逆用される。その結果として，かつての MF のシステム下で肥大化し硬直化した管理の在来的ヒエラルキーも，またそれと対をなしてきた既成の労働組織とその既得権益もともにとり崩され，新たに資本の個人ないしその「集団」レベルにたいする直接的で，トータルな管理の体制が現れるというわけである【いわゆる組織管理の「フラット化」「チーム化」→「フレキシブル化」，それに先行＝連動しつつ，急潮化する「ノンユニオン化」の基礎（93年の米民間企業組織率11.2％へ――名実ともに「ニュー・ディール」以前のかの non union era の再現へ）――ちなみに，「国際競争力回復の決定版」とのふれこみでいまや「ポスト冷戦」下の全米ビジネス界を席捲するの観さえある「リエンジニアリング」の大前提。それなしには，いうところの「上からの」「ラジカルな」「業務プロセスの再設計」などどんなものでも実現不可能だという意味での大前提がここにある――「合理化」のいわば情報化段階としての「リエンジニアリング」把握の一視点】。

また，同じ PC＝WS ベースのネットワークをつうじる労働者たちの情報共有＝共同利用，彼らの《全体的個人》への成長の展望についてもむろん，同様のことが指摘されねばならない。ネット

ワークをつうじて集中される全情報の所有とその利用が依然資本によって統制されるとき，この機構は，その反対物に，すなわち，労働者個々人を駆り立てて，資本のために情報集中＝利用の効率化をきそう彼ら個人間ないしはグループ間のしれつな競争を組織＝強制し，その成果をあげて資本の側に吸い上げるための機構として働く。だがここでも特徴的なことは，「労働の細分化」と「知識からの分離」という資本による労働支配の常套，さらにいえば，〈協業にはじまりマニュで発展し，大工業で完成する〉[12]とマルクスが総括し，テイラーがその「科学的管理法」の柱石に据えた，この古い資本の基本原則のうえに，いまやそれとはまさに対照的な労働の「全面化」と「知識化」への要請が，ほかならぬその資本の要求として，したがって資本の労働にたいする強制の形で，しかもいまや「ノン・ユニオン」下で孤立化し（そのうえ次にみるように）容赦ない失業の不断の脅威にさらされる個々の労働者間の競争の組織化を伴いつつ，むしろ主要な側面にたち現れること（「マニュアル・コントロール」から「自己責任」「結果重視」へ），その場合，労働にたいするこの新種の過重負荷をそれがとらえる労働の全範ちゅうにわたって強制＝組織化する機構として働く情報のネットワークはまた，当然の帰結として，この過重負荷が生み出す「テクノストレス」など，一般に情報化にたいする広汎な「不適応症候群」（報ぜられるコンピューター「打ちこわし」まで）を，同じくそれがとらえる労働の全範囲にわたって伝播・感染させ，沈澱せしめずにはおかぬ恐るべき「社会的病理のネットワーク」としても働くことであろう【――「合理化」の情報化段階としての「リエンジニアリング」把握のいまひとつの視角】

「ローマの奴隷」と比定された近代の労働者を繋ぐ「見えざる鎖」は，いまや情報のこのネットワークという半ば visible な形で，また内容的には，このネットワークとそれによる電子情報化世界の構築＝利用が可能にする，まさに時空の制約さえのりこえる，その意味で究極の労働包摂と支配，究極の労働監視と拘束の機構として，その完成された姿をあらわすともいうべきか。しかも，この新しい支配と拘束のもとにたつのは，むろん奴隷でもなければかつての労働者でもない。ほかならぬこの最新のネットワークを担い，このネットワークの本性とそれが構築する情報世界の新たな法則とにしたがって《全体的＝全社会的個人》へと成長してゆかざるをえない新しい労働者＝人類なのである。だが，その一点からも明白になる，資本支配のこの究極の機構の歴史的地位，究極の時代錯誤，究極の戯画へのその転化の必然といった側面は，また下段でたちかえろう。

なおここで最後にあげるべきは，以上のように情報ネットワークをとりこむ資本の新しい支配が生みおとす当面最大の経済的帰結――いうまでもなく失業，しかも新しいタイプの失業の問題である。この場合，その新しさはまず，これまたいうまでもなく，いまや工場現場を含む一切の組織管理＝運営の機構＝様式と一体化し，その新機軸ともなった情報の管理＝処理の機構＝様式におけるひとつの革命，つまりは MF ベースから PC＝WS ネットワークベースへの転換を軸として，たち現れてきていること【産業＝機械化ベースの失業との範ちゅう差。いまやそれをも包摂する産業＝

(12) ibid., S. 382. 同上 (3)599頁。

情報化ベースの失業――ひとつの段階差の介在】。じじつそれは，MFシステム下で肥大＝化骨化した企業管理運営のヒエラルキッシュな在来型定型と多かれ少なかれそれにとりこまれた在来型労働組織の諸系統の急激な破壊の強行を推進の軸とし（全業務プロセスの見直し＝再設計――「分業原則の廃棄」＝「ビジネス革命宣言」！），かつての労働現場＝ブルーカラー層中心（「製造原価」攻略）から一般管理・事務部面＝ホワイトカラー層中心（最後の聖域「一般管理費」削減――「知的労働の生産性向上」！）へと急速に重心を移しつつ，全般化する雇用崩壊の世界的な波として，周知のところ。羊によって緑のふるさとを追われ，機械によって灰色の仮宿まで失った過剰人口は，いまやその行きついた最後の避難場からさえ追われねばならない（むろん追われるものだけでない。残るものもまた等しくとらわれる「レイオフ生き残り症候群」―まさに，行くも地獄とどまるも地獄）。いまひとつこれに加えるとすれば，さきにも指摘したことだが，ME＝情報化にもとづくこの大波はさらに，他方その同じME＝情報化（「アジア化」）のいわば体制的な帰結でもあった冷戦体制の解体と世界的大不況の圧力とあい呼応して，いまや文字どおり全地球的なひろがり（この大波は中国数億の農民さえとらえつつある！）と「世紀末」的な形相（過剰人口にとってもう他に逃げ場はない）を示しつつ，その最終的な解決を，ほかならぬ全過程の演出者＝元凶たる資本にたいして突きつけてきつつある，ということであろう【――「合理化」の情報化＝最終段階としての「リエンジニアリング」把握のいまひとつの，第三の視角】。

以上が，前段で示した情報ネットワーク化の技術学的展望とはおよそ対照的な，その資本主義的利用の直接の帰結であり，それにとらえられた労働者にとっての新たな地獄絵だとされようが，問題はまさにそこのところに成立する，といわねばならない。もともと資本主義という敵対的階級社会の下では，前者の技術学的展望も，いわばその「第1の否定」である後者の資本主義的利用をつうじてのみ，より正確にはその利用の発展深化をつうじてはじめて，自らの道をきりひらいてゆくからだ。その技術学的本性とは絶対的に矛盾するこの資本主義的利用の発展こそ，そのなかで極大化してゆくその矛盾の発展深化こそ，その本性＝展望実現のための「唯一の歴史的通路」[13]にほかならぬからだ。そしてこれが，上来の主題にかかわって認識さるべき第三の，つまり歴史的に現実的な展望にほかならない。だが，このいわば現代の「煉獄の旅」はまだはじまったばかりでもあり，さしあたりここでは，次の指摘だけで十分であろう。

(1)一方では，情報システムの利用が初期の定型的な生産管理や在庫管理など部分的＝戦術的なものから，最近のPC＝WSベースのネットワーク化を前提にしたCIMやSISなど経営と企業全体の死命をさえ制する高度＝戦略的なものへと進めば進むほど，(2)また他方では，そうした高度戦略的利用への突進が，ますますし烈になる競争（冷戦＝体制的独占解体下の世界一元化競争の圧力）とvirtual化する蓄積（ハードからソフトへ，総じて自立化する情報化世界の組織的利用への軸足移行）と

(13) ibid., S. 512. 同上 776頁。

の最有力のてこ，つまりは「ポスト冷戦」＝独占解体下の企業「生き残り」の要件として，一個の世界史的強制とさえなればなるほど，(3)以上，一言にして情報ネットワークのそうした高度＝戦略的で高度＝資本主義的な利用が不可避となればなるほど，それを支える絶対的保証として，前段で示したこの情報ネットワークの技術学的本性の実現とそれがつくりだす新たな情報化世界の法則の貫徹が，もはやたんなる技術学的展望としてではなく，同時に，その利用をつうじてこのネットワークと一体化した資本じたいの経済的に戦略的な要求として，まさに「死活問題」ともならざるをえない。すなわち，このネットワークを担う労働の全階層各個人の全面的発達，とりわけその意識世界の拡大＝高度化が，したがってまたそれを制度的に保証するさきの情報公開＝共有と決定権の分散化が，いまや資本にとっての「死活問題」[14]とならざるをえない。(4)だがこの新たな要請も，与えられた全舞台＝全過程を依然私的＝資本主義的なそれとして枠づける最終の制約＝基盤――私的＝資本主義的所有（「労働と所有の分離」→「労働と決定権の分離」「労働と知識の分離」の枠組み）と絶対的に矛盾すること，明白であって，資本はいまや，そのいわば最後の地点に追い込まれる――そこではまさに資本の枠を乗り越えることが，ほかならぬ資本として生き残るための要件となり強制となる！　そしてこれこそ，マルクスが成立したばかりの英国「工場立法」，その貧弱な「教育条項」のうちに早くも透視した，変革へのあの「唯一の歴史的経路」の今日にみる姿にほかならない。再びマルクスにならっていえば，大工業の出現とともに「恐るべき痴愚」となったのが「靴屋は靴屋の本分を守れ」というかの「手工業的知恵の絶頂」[15]であったとすれば，いま新たな情報化世界の出現とともに「恐るべき痴愚」，「恐るべき時代錯誤」となるのは，「知的所有権を守りひろげよ」という，いまや追われる身ともなったアメリカによって口授されるこの資本主義最後の「知恵」，その今日的「絶頂」であり，さらにはそれをつうじて舞台の中央に引きだされざるをえなくなる私的＝資本主義的所有それ自体なのである。

## IV

もはやこれ以上先走ることは慎むべきであろう。まず何よりも時期尚早というべきであろう。「ポスト冷戦」という時代のかかえこんだ問題のスケールから推して，現在はなお，「建設」はおろか，それにさきだつ「破壊」の仕事さえ，まだ始まったばかりと言わねばならぬだろうからだ。上来の文脈上，なお語るべきことがあるとすれば，それは，むしろこれまでの主題展開の背景ともなり，その全過程をほかならぬ「情報化」という新しい時代の色調に染め上げてきたひとつの新しい事態，いうまでもなくPC＝WSベースの情報ネットワークをつうじて現実世界から自立化する新たな電子情報世界，いまや現実世界をグローバルに包摂するに至ったかの観のあるこのいわばvir-

(14)　ibid., S. 512.　同上　775頁。
(15)　ibid., SS. 512-513.　同上　776頁。

tual な経済空間の性格いかん，ということになろう。もとより「門前」にもおらぬ門外の，「小僧」にもなれぬ老骨の，手すさびの域をでぬが，むしろそのことを逆手にとって，若干の注文めいた問題をだし，結びにかえることにする。

ここでまず，情報の自立化という場合，その情報はむろん情報一般でも，あるいはその観念的な表現形態一般のことでもない。それは，ほかならぬ最新の ME 技術の発展をベースにした情報処理・通信の革命の産物として，明確な歴史上の日付と実在性をそなえている。情報の概念は，例えば，マルクスが彼の体系構築のための「方法」にかかわって論じた「労働一般」の概念と同じく，「ノアの洪水以前からの定有をもつ」とはいえ，それがひとつの歴史社会を読み解くキイワードとしての実質をそなえてくるのは，まさしくこうした「歴史的諸関係の産物」[16]としてにほかならない。しかもそれは，すでにコンピュータ処理を前提し，コンピュータ・ソフトウェアを主体とする認知・計画・指示情報の体系的集積として，コンピュータ機構（その主メモリ）に格納されてそれ自体ひとつの実在的な電子回路空間をつくり，電子メカニズムとして現実に機能するのである。私がこの方面の師匠にしている（当方から勝手に）石沢篤郎（野口宏）氏の言われるソフトウェアの「二重の性格」[17]（表現形態たると同時にメカニズムをなす）であり，その二重性はこの情報化世界全体をつらぬく基本的性格をなすといえよう。以下に列挙するこの世界にまつわる問題の全特徴もむろん，ここに由来する。

そこでまず以上の点の確認からひきだされる第１の点はこうである。ME＝情報化革命（現在の姿では PC＝WS ベースのコンピュータネットワーク基調）をつうじる電子情報世界の形成，その現実世界からの自立化という現下の事態は，人類社会の生産力の歴史的発展の系列上に位置し，そのひとつの新しい段階を画するものにほかならぬ，ということであろう。この視角はすでに，生産過程＝生産様式という基底的視角から主として技術論ないし技術社会学の領域で問題にされてきたところとまさしく対応し，そこではこの新しい性格の内容が「機械と大工業」の段階を限定＝包摂する新しい「ネットワーク型生産システム」ないし「ネットワーク型産業構造」[18]とされてきたことからも，まず，さしあたっては首肯されえよう。

だが，問題は第二に，この新段階移行が，たんにこれまでのその種の移行（手工業から大工業，さらに別の次元では軽工業から重工業へ）とならぶ，もうひとつの新しい段階への移行としては処理しきれない新しい質を，飛躍を含んでいる，という点に見いだされねばなるまい。そのことは，早いはなし，この情報化世界がほかならぬ電子回路空間におけるデジタル符号の組み合わせという，現実世界（ニュートン世界）とは隔絶した「極微の世界」（電子論的世界）に位置し，したがってま

(16) K. Marx, Grundrisse der Kritik der politschen ÖKonomie, Dietz Verlag, 1953, S. 25. 高木監訳，大月書店，第１分冊27頁。

(17) 石沢篤郎（野口宏）『コンピュータ科学と社会科学』大月書店，1987年，52-53頁。

(18) 同上，30-35頁。

た，その世界における運動は，対応する現実世界の物理的制約＝時空の制約からさえフリーな，その意味で一種 virtual な現実世界を構成していること，こうした基本的に新しい性格からしてすでに明らかであろう。しかも，次に問題にする画時代的なこの世界の社会＝経済的含意もすべて，まずこうした質的飛躍のうえに，その生産＝科学技術学的基礎をおいているのである。要するに，この場合，同じ新段階への移行といっても，それはこれまでのような産業＝機械化の線上でのものからいまや産業＝情報化の線上のそれへと遷移をとげ，明らかにその軌道がシフトしているわけである。さらに過程の科学＝技術史的な背景にたちいっていえば，20世紀における「極微（大）の世界」の科学の成立とその技術学的応用の発展が（軍事から産業一般へ），まずその発展に必要な要件として，その過程を現実に担う人間の主体的実践にかかわる科学と技術の新しい構築をほかならぬ情報の科学と技術の形で要請し，かつ可能にしたわけであり，この双方の成果がいまや global にひろがるコンピュータ・ネットワークであり，それがくりひろげるこの新しい世界の成立にほかならない（コンピュータ＝情報の科学なしでは，「極微（大）の世界」の制御＝操作はおろか計測さえ問題にもなるまい）。それは，また『要綱』のマルクスがすでにあの時代に予見した世界，即ち富の尺度がもはや直接の労働時間では測れなくなる時代（資本の全運動の最終的基礎＝価値規定の止揚），それにかわって自然と人間にかかわる一切の科学と技術学のまさに社会的な全蓄積が富の内実を，「生産力」の内実を規定するようになる，そうした新しい世界への移行の開始をこそ，告知するものにほかならない【この移行がそれをとらえる資本にとってもはや己れの支配の新しい段階へのもうひとつの脱皮＝発展ではなく，その止揚へ向かう『プロセス』に帰結してゆかざるをえない必然の最深の基礎がそこにある】。それがいま，社会の科学の新しいフロンティアとして，課題の焦点たつにいたるわけである。

では，この新しい世界が内蔵する展望はなにか。それをさしあたり抽象的に，即ちこの世界が資本主義のもとでうけとる形態規定とは区別して純粋に示すこと――それが次の第三の問題となろう。だが問題はここでも二面的である。まずこの文脈からここで改めて確認を要する重要な点として，この電子情報世界の明らかな技術学的限定性の問題がある。すなわち，ここで情報世界の自立化といっても，その自立化は，いうまでもなく，当面なおコンピュータによる解読＝処理＝通信可能な「人工言語」でつづられた形式論理の世界という自己限定性をもつものとしてにすぎないということと，それは関わる。否むしろ，この形式論理の世界への自己限定，具体的には人間の認識活動の基礎をなす二値論理（イエスとノー）への依拠を逆手にとる形で，情報の世界を征服しえてきたにすぎないということである。この新しい世界の歴史的意義＝展望的含意も，まさにそうした自己限定のもつ意義に発するものだからだ。以下の点が指摘しえよう。

まず，そのまさに形式論理性をつうじて，現実の世界をまさに形式＝普遍的にとらえることができる。およそ形式化され，数量化されるかぎりで，自然と人間のすべての営みが，この世界の下に包摂され，自立化されうる対象となる。対象としてとらえるだけでなくさらに，この世界のそうし

た「電子メカニズム」としての性格をつうじて現実にもそれがとらえる対象世界の制御と組織化にますます圧倒的な力を揮う，それ自体新しい生産力として機能するというわけである。だが，それだけでもない。

この場合，さらに決定的なことは，情報化の歴史における転換点，ひとつの革命として，この小論を貫くモチーフとしてきたあの事態が，この文脈のなかでもつことになる新しい意味のうちに認められねばなるまい。この転換をつうじて，これまで情報の独占をベースに，その世界を「上から」「一方向」的に分断＝操作してきたMFとマス＝メディアの支配にかわって，いまやそれとは技術学的本性からいってまさに対照的な，情報の共有＝共同利用をベースに世界に向かってひらかれたPC＝WSのネットワークのシステムが，さらにそのマルチ＝メディア化（万人による情報利用＝発信への道）への展望が現われること，そのことの意味である。それはもはや，virtualな世界としての自立化をつうじる対象的世界の制御と組織化の可能性の拡大といった純技術的な展開にとどまらぬ。そのレベルをこえて，そうした「情報化」のまさに『方向と形態』におけるひとつの革命をも内蔵せざるをえない，だろうからである。上来のモチーフの再確認になるが，商品＝貨幣＝資本の支配（物質文明の枠組み）を完成する「情報化」から，その解体と止揚を含む「情報化」への転轍，かの「指令型」計画を止揚し「自由な人間の自由な結合」をめざす新しいレベルの計画への対応する展望，そしてそれらを支えるさきの《全体的＝全社会的個人》への人間発達の用具へのコンピュータ・システムの役割転換，要するに情報化におけるこの歴史の弁証法がそれである。

ここまで来れば，最後の第四の問題に触れざるをえない。即ち，情報化が生みだすこの新たな世界の自立化も，あくまでそれが資本主義の基礎上でのものであるかぎり，それは，これまで問題にしてきたような純粋で単純な姿ではなく，端的にいって，商品としての情報世界の自立化という形態規定のもとでしか現れず，したがってその自立化が含む先の展望も，現実には資本によるその特殊な商品世界の包摂＝利用という矛盾にみちた過程をつうじてしか貫かれることはない，つまりは，上来の主題のこうした角度からの再提起である。もともと「煉獄の旅」はこの新たな世界全体に負わされた宿命なのだし，経済学が越えてゆかねばならぬ本来の旅路，その難関もむろん，そこに重畳とかさなってくるわけだが，なにせその旅自体がまだはじまったばかり，そのうえ前節では少々先走ってその主要な道程のひとつ（資本による情報世界の包摂＝利用が方向づける資本＝労働関係の新たな道程）を眺望してきたわけだから，以下では，ただひとつ，その際には前提として置き去りにしてきた問題のもうひとつの基礎的側面にだけ触れて，稿を閉じることにしよう。

それはほかでもない。情報世界の資本による包摂＝利用のそもそもの前提となるその世界の商品形態による処理から生まれる問題，つまりは商品世界に固有な物神性のこの新たな情報世界での再版に関わる問題である。この社会で情報が商品として処理されてゆくかぎり，近代社会の総姿態をとらえる商品（→貨幣・資本――以下は略）物神の世界は，いまやその基礎上に，ひとつの相似形を，新種の商品＝「情報物神」の世界を生みださざるをえないが，問題はまず，この初発のうちに発生

する，というべきであろう。即ち，この新たな情報世界が物神性を帯びざるをえない，その根拠は，あくまでその「商品化」「商品形態」にあるのであって，それ以外の関係にあるわけではないという，このそれ自体としては自明の理を再確認してかかることが，この場合，肝要なように見えるからである。あるいはこういってもよい。私人（企業）のあいだでの特定の情報のやりとりが，商品＝価値関係として自立化＝物象化する必然がここでは問題なのであって，それは，これまで問題にしてきた情報世界に固有の発展関係，即ち情報処理・通信技術の発展をつうじて情報世界（自然・社会・意識のすべての世界を含みうる）が特定の電子情報空間＝電子メカニズムとして自立化＝物象化することとは直接的な関係がないのだということ，そのことをまず明確にしておくために，というように。というのも，この世界の現実の過程では，もともと発生根拠も性格も違うこの2つの自立化＝物象化が，いわば二重あわせで一本化し，かつ相互に浸透しあい対立しあうことによって，この世界の物神的関係を増幅＝複雑化し，見る人の眼を欺く特有の形相を示すにいたるからであり（いまや virtual な世界を媒介として成立展開する商品物神のいわば極致の形成），したがってまたそこから，この双方の明確な区別と連関，相互浸透と対抗の関係を，この世界の具体的発展の具体的分析をつうじて解析してゆくことが，改めて問題把握の先決事項となってきているようにみえるからである。「詐欺師」と「予言者」との同居は，もはやひとり信用の世界だけのことではなくなっているというわけだ。——「情報物神」，その発生根拠の問題にかかわる世上の論議に鑑みて念のため。

こうして，成立する新たな「情報物神」の世界がいまや電子情報世界をとりこんで成立する資本支配のすぐれて現段階的な媒介＝隠蔽＝正当化の機構となる。その点，形式的には商品物神一般の場合と異なるところはない。だが問題は第二に，その内容の点にあろう。物神性のそうした本質・役割が，通常の商品世界のうえにではなく，電子回路空間という一種 virtual な世界のうえに，それを媒介して成立する「情報物神」の場合，その役割＝作用は，商品物神一般の場合のように，対象的世界にたいする虚偽意識の正当化というにとどまらず，直接に人間の意識ないし思考形式にたいする虚偽意識＝形式の正当化＝強制にまで及ばざるをえない必然を宿す，という意味からである（「電脳人間化！」「電脳化症候群」！）。そしてこうした新たな関係が，他方電子情報世界の自立化という同じ過程（先の二重関係）に発しながら，この関係とは絶対的に矛盾する，さきの《全体的＝全社会的個人》への発達展望との関連で，さらにいえばその後者の展望を具体化してゆくうえで不可避となる「否定」の契機として，改めて本格的＝批判的に検討されねばならなくなってきているのだ，といえよう。——「情報物神」の本質＝役割の独自性にかんする問題の指示までに。

「情報物神」の新たな世界をつくる以上の2つの問題側面の列挙からでてくる，第三の，最後の問題は，この世界の歴史的地位に関するものである。内容的には，繰り返しになるが，電子回路空間という virtual な世界を媒介に，人間の意識＝思考世界にまで迫る，商品物神のいわば極致としてのこの「情報物神」も，だが他方，そのまさに成立＝存立の根拠をなす「商品化」＝「商品形態」という点で，通常一般の商品にそなわるような歴史的に妥当な客観的根拠さえ欠いていた【情報本

来のもつ普遍性・公共性からいっても，その現代の基本形態たる「ソフトウェア」で典型的となるマルクスのいう「一般的労働」（科学的＝技術学的労働）の産物というその内実からいっても，元来が「商品化」にはなじまない，したがってそれにもとづく資本独占にも】。したがって，そうした「妥当性」は，むしろ自らの外部の環境に，即ちまずは現存の商品関係の「擬制」のうえに（「擬制的商品」としての「商品化」！），他方では経済外の法の世界の保護のうえに（一般に「知的所有権」，特に「著作権法」），求めざるをえないという致命的な限界を初発から宿していた。[19] しかもこうした内在的限界は，いまや周知のとおり，情報化の急速な進展につれて明らかな不合理・錯誤として露わになり，最後のよりどころたる法の枠組みをも破綻に追い込むまでに至っている（とりわけ最近の「ネットワーキング」「オープン化」それに「マルチメディア化」の大波が既存の法体系，とくに「著作権法」に与えつつある衝撃ひとつとってみよ[20]）。こうした特徴的事態が，新たな「情報物神」の歴史的地位いかんという文脈のなかで，改めて問われねばならぬわけである。一言にして，商品（資本）物神のいわば絶頂をきわめる「情報（コンピュータ）物神」はまた同時に商品物神の最後の形態たらざるをえないというように。そのことはまた当然，このうえに築かれる資本の新しい支配，資本による情報世界の包摂＝利用なるものの歴史的地位をもその根底から制約せざるをえない。ほかならぬ資本関係をつうじて導入＝構築された世界大の電子情報空間，それを自らの新たな枢軸に編入しつつ急進展を遂げる現代社会の生産諸力にとっては，そのまさに資本関係はおろか，それを基礎づける商品関係，この社会の「原基」＝「細胞形態」さえも，もはやその新たな内容にそぐわない，時代錯誤のカラと化しつつあること，そのことを上の関係は明示しているのだから。――「情報物神」の歴史的地位の問題にかかわっての主題の再確認までに。

以上。最後に。――かつて「大工業」を「マニュファクチュア」のメガネでみる愚を戒めたマルクスの知恵[21]に倣うとすれば，いまはもう2段ばかり進めて，次のようにいうべきではなかろうか。急潮化する現下の「情報化」の進展＝展望を，「大工業」のメガネでみる愚を重ねてはならない。さらにいまひとつ，その「大工業」と応等的で，それをほかならぬ「独自に資本主義的な生産様式（資本のもとへの労働の実質的包摂）」として枠づけてきた，「商品」＝「資本」のメガネでみる愚を犯してはならない。

1994.4.24

（千葉大学法経学部教授）

---

(19) ソフトウェアの「商品化」に含まれる問題点の検討は，後続の二瓶敏「情報革命と資本主義の矛盾」，とくに「II．ソフトウェア商品化の矛盾」を参照されたい。

(20) 「知的所有権」の含む問題点をこうした文脈から歴史的にサーベイしたものとして，さしあたり加藤英一「知的所有権問題の展開」（野口宏・貫隆夫・須藤春夫編著『現代情報ネットワーク論』1992年，ミネルヴァ書房，所収）参照。

(21) Marx-Engels Werke, Bd.23, S. 370. 『資本論』青木文庫(3)583頁。